

③ 長良川と人々

岐阜の人々は、古くから長良川とともに生活し生業を営んできました。

戦国時代には、道三公とその息子義龍が戦った「長良川の合戦」の舞台となり、関ヶ原の戦いの前哨戦では、西軍と東軍が長良川で対峙しました。

また中河原湊・鏡島湊などの多くの川湊が開かれ、材木、和紙、生糸、薪炭、石などが運ばれました。

長良川では伝統的な川漁が行われ、中でも1300年以上の歴史を誇る長良川の鵜飼は代表的な生業で、現在も6名の鵜匠が



鵜飼漁の準備をする船頭

漁を継承しています。

かつて川は人々にとっての格好の遊び場であり、川を泳いで渡るとは、子供たちの間で自慢のひとつでした。

また現代の人々も、まつり、花火大会など、憩いの場としても長良川を利用しています。今でも長良川は、岐阜の人々の生活の中心になっています。



川まつりの提灯船



年2回行われる長良川での花火大会

④ 金華山と人々

道三公は、1540年前後から金華山の稲葉山城を拠点とし、西麓にあった伊奈波神社や寺社群を町の南部に移転させ、その跡地に居館を建設しました。

永禄10(1567)年、信長公は稲葉山城を攻め、斎藤氏を追放しました。信長公は、この地域を岐阜と改称し、城と館をさらに整備しました。

関ヶ原の戦いの際に岐阜城は落城し、政治の拠点は加納に移ります。金華山は一般の入山が禁止され、尾張藩藩主の鹿狩りなどの場となりました。その後も保護が図られたことにより、現在も多様な生態系や植生を維持しています。



牧田種麿「長良川鵜飼図」(岐阜市歴史博物館蔵)

また江戸時代後期以降は、鵜飼の背景として、絵画などの

題材になりました。

明治時代になると、金華山は一般に解放され、多くの人々が訪れるようになります。岐阜城復興天守、三重塔が市民の寄付によって建設され、金華山は岐阜のランドマークとして市民に愛され、その魅力を増していきます。



初代の岐阜城復興天守

現在でも、毎日多くの市民が山に登り、山頂からの眺望を楽しんでいます。



登山を楽しむ人々



金華山山頂から見た夜景

⑤ 町並みと人々

川原町地区と鵜飼屋地区は川に接する堤外地の集落です。

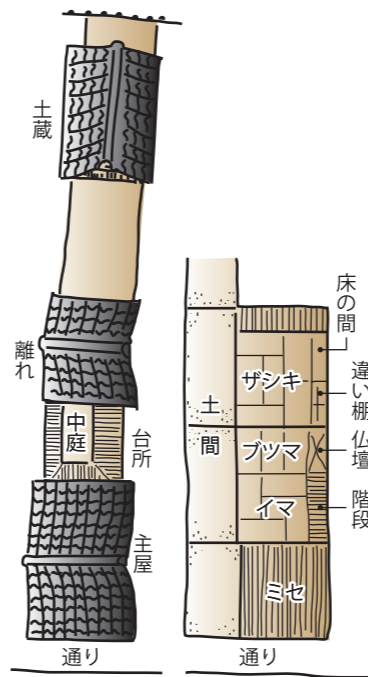
鵜飼屋地区には今も6名の鵜匠が住んでおり、漁を営んでいます。また、地域の家々と川をつなぐ細い路地が数多く通っており、この地区の人々の生活と長良川の距離の近さを示しています。

川原町地区周辺は、長良川の水運と街道などの陸運の結節点として古くから経済活動の盛んな場所でした。

戦国時代、道三公や信長公は、物流の中心となる長良川と防衛機能に優れた金華山に着目し、西側に町(今の旧城下町地区)を整備しました。道三公や信長公は城のある金華山へ向かう東西道路を整備し、そして堀と土塁で町を囲みました。

江戸時代になるとこの地区は尾張藩が治めます。中河原湊付近に長良川役所が移転したことにより城下町は、商業都市「岐阜町」へと発展しました。現在の郡上市や美濃市

といった長良川の上流から材木や竹、和紙などが運ばれたため、岐阜町では問屋業が発展し、さらにそれを利用した提灯・団扇・傘などを製作する手工業が発達しました。そのような生業を支えた町家は、主屋は道路に接し、「う



一般的な建物の配置 主屋の間取り

なぎの寝床」状の敷地の奥に土蔵を配置するのが一般的でした。土蔵には商品や材料が保管されることから、主屋内の土間は、ミセと蔵の間の商品の頻繁な通行を可能にするため広めに造られました。



土間(右の白い部分がトロコレールの痕跡)

明治24(1891)年の濃尾地震で町は壊滅的な被害を受けましたが、道路などの基盤をほぼ変えることなく町は復興を遂げました。明治43(1910)年、金華山山頂に岐阜城復興天守が造られると、岐阜の人々は城が見える位置に本座敷や茶室を置くようになります。おそらくそこからの眺めにより、大事な客人をもてなしたのでしょう。



座敷から眺める金華山と岐阜城

近世の初め頃までには、両側町の町割りが形成され、現在もその町割りの中で人々は生活しています。

また、いつごろから始まったかはわかりませんが、地域の人々は、通りに面した家屋の木部を年に数回水や湯で洗います。そのような習慣により、白木の格子の町並みという独特の景観が生み出されました。



白木の格子が続く町並み



格子の洗い